

窓辺

家族の気持ちで
選手に寄り添う

中野 ヤスコ

小学校で水泳、中学では新体操、高校から硬式テニス。愛好家レベルでスポーツを楽しむタイプでしたが、公認スポーツ栄養士として3年間お世話になった実業団女子陸上部は強豪チーム。いきなり世界レベルの選手たちの相手をするこ

とになりました。失礼ながら当初は名前も知らず、競技に関しても一般的な知識のみだったので戸惑いましたが、まずは専門用語を一から勉強し、自分の役割と立ち位置を明確にしながら、選手やチーム

スタッフたちと信頼関係を築こうと心掛けました。特に、スイス、アメリカ、中国など、オリンピックや世界陸上への出場切符を懸けたマラソンの選考レースの事前合宿に参加した際は、いかに自分が狭い世界で生きてきたかを思い知ら

されました。その中の1人が2015年の世界陸上北京大会出場を決め、大会1週間前から帯同依頼もいただきました。女性アスリートは男性アスリートと比べ、指導者との意見の食い違い、周囲

の期待からのストレス、同僚との軋轢、プライベートなど、競技以外の悩みも多いのが特徴です。スポーツ栄養士である以前に年長者として相談に乗り、彼女の好物を作ってトレーニングに集中させることもありました。「中野ママ」と慕ってくれるこの選手とは、私がチームを離れてもずっと交流が続いています。

その後、オリンピックの短距離選手たちの海外合宿帯同や、サッカー日本代表での活躍に期待がかかる北川航也選手(清水ユース出)ら県内外から個人サポーターの依頼などが、次々と舞い込むようになりました。

(公認スポーツ栄養士)